

---

# 怖いもの

坂田火魯志

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

怖いもの

### 【Nコード】

N7629B

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

江戸時代の話。神社で博打に興じていた熊は意気揚々と勝ちまくっていたが急に何かを見てしまい。コメディータッチの幽霊ものです。

## 第一章

### 怖いもの

何時でも何処でも博打打ちというものは存在する。金をかけて何を楽しむのかはその博打打ちそれぞれだがそれで女房を泣かせる男が多いのも何時の世も同じである。

とりわけ江戸時代はそんな男がそこいらにゴロゴロした。とりわけ上州はかかあ天下とからっ風という言葉まであった。これは女房が絹で手に入れた金を亭主が博打ですってそれで家を叩き出された結果の言葉である。上州だけでなく江戸でもまあ同じようなものだった。

ここでもそうだった。長屋の側の神社の中で夜遅く男達が集まって花札をやっていた。場所を提供しているのはこの神社の神主で仕切っているのはその筋の者である。

この時代博打と言えば寺か神社、京都だとそこに公家の家まで加わっていた。寺等は奉行所とはまた管轄が違う為賭場を開くには都合がよかったのである。その上前はきつちりと寺や神社に入るのだ。ご開帳という言葉は境内等で一応はこっそりで行われたからできた言葉である。この神社でもそれは同じであった。

暗い境内に蠟燭で灯りがともり、その中で男達が車座になって花札に興じていた。酒やこうした場所で食べられる鉄火巻きも健在であった。

「ちえっ、また負けたよ」

その中で中年の男が札を前に放り出して苦い顔を作っていた。

「今日はついてねえぜ」

「じゃあ熊さん止めるかい」

「ついてないならよ」

それを聞いた相手の男達がこう彼に声をかけてきた。だがその男熊はそれには首を横に振った。熊というだけあってかその腕からは

濃い毛が見える。髭は剃られてはいるがその後が青々としている。如何にもといった感じの大柄で豪快そうな男であった。

「おい、馬鹿言うなよ」

そう言つてまた札を手に取る。

「負けた分は取り返す。それが俺の流儀なんだよ」

「じゃあまだやるんだな」

「当然だろ」

目を彼等に向けて言う。

「勝つまではよ。江戸っ子だからな」

「江戸っ子つてそんなだったか？」

それを聞いた仲間の一人がそれを聞いて呟く。

「違つたと思うけれどよ」

「俺の頭の中じゃそうなんだよ」

熊はその仲間に対して言い返した。同時に不敵な笑みを浮かべる。

「ほら」

そして札を見せる。今度は彼の勝ちであつた。

「これで負けた分は取り返したな」

「相変わらず強いね」

別の仲間がそれを見て苦笑いを浮かべて述べた。見れば今回は彼の一人勝ちであつた。

「博打にかけちゃ」

「ああ、これだけは何処のどいつにも負けねえよ」

彼はその不敵な笑みのままそう述べた。

「あと大工の腕前もな」

「いいね、その言葉」

「粹だねえ」

「だから言つただろ、江戸っ子だつて」

彼はまたそれを言った。どうやら江戸っ子であるというのが彼の誇りであるようだ。

「博打と喧嘩、あと火事は江戸の華だろうが」

「博打もかい」

「おうよ。この三つが怖くて江戸にいられるか」

実際にこの時代の江戸では博打がかなり盛んであった。幕府も何度が禁止令を出していたがあまり効果はなかった。そもそも行われているのが寺や神社の中なので取り締まりにくいのである。そこは寺社奉行の管轄だったからである。

「違うか」

「まあな」

「俺達だって江戸っ子だしな」

仲間達もその言葉に応える。そしてまた札を手にしていった。

## 第二章

「それはあるな」

「特に火事と喧嘩はな」

「そうよ。俺はどっちも全然怖くはねえぜ」

熊はそう言つて今度は不敵どころか向かうところ敵なしと言わんばかりの笑みを浮かべてきた。

「特に喧嘩じゃな」

腕つぶしを見せてくる。大工の仕事のせいかなりしつかりしている。

「こつちでも負けた覚えはないぜ、ガキの頃からな」

「自信たつぷりだね」

「まあな。刀持ったお侍様はともなくな」

「ははは、それはどうしようもねえだろ」

「あの人は住んでる世界が違うさ」

「まあな。それは置いておいてだ」

一呼吸置いて鉄火巻を口の中に入れる。それを飲み込んでから酒を一杯。博打での基本的な飲み食いであつた。その食べ方飲み方にも何処か粹を思わせるのが江戸っ子の流儀である。

「怖いものだよな」

その話に戻った。

「ああ」

「おめえ等何かあるか？怖いものがよ」

そう仲間達に対して尋ねてきた。酔った調子からであるか言葉が少し碎けてきていた。

「そうだなあ」

「俺だと」

仲間達はそれを受けて話しはじめた。車座になり、その周りが蠟燭の灯りだけなので何処か不気味で怪談をしているような雰囲気だ。

ある。仕切り役のその筋の者は二人でのんびりと酒を酌み交わしている。その中での話であつた。

「あれだな。怪談だ」

そのうちの一人が言つた。

「俺はあれだけは苦手だなあ」

「何だよ、そんなものが怖いのかよ」

熊はそれを聞いてその仲間に対して笑つて述べた。

「落語とか歌舞伎とかのあんなもん。怖くとも何ともねえぜ」

「そりゃあんたはそうだろうけれどな」

彼は熊に対して言葉を返した。

「俺はな」

不敵な笑みはそのままだ。それがまたやけに似合っている。

「幽霊が出ても何ともねえぜ」

「じゃあ化け物もか」

「化け物が怖くて江戸にいられるかよ」

そういう話の多い街である。本所七不思議という話もある。他にも色々な話があるのが江戸なのである。それだけ大きな街で文化的に繁栄しているという証拠でもある。

「違うか？」

「違うも何もよ」

仲間達はそれに対して答える。

「別に信じてないとかそういうのはないのか」

「いるとかいないとかはどうでもいいんだ」

やはり剛毅な言葉であつた。

「目の前に出ても怖くはない。それだけだ」

「そうかい」

「それでだ」

話を続けさせてきた。

「他に何か怖いものはあるか？」

「そうだなあ」

別の仲間が酒を飲みながら述べた。

「俺は地震だ」

「地震か」

「ああ、あれが一番怖いな」

杯を置いてまた述べた。

「ガキの頃にえらい地震に遭つてな。それからだ」

「そんなに怖いのか」

「地震になつたら一目散に逃げちまう」

こうまで言う。

「あれだけは勘弁してもらいてえな」

「といつても何時何処で起こるかわからないものだからな」

熊は彼に対してこう述べた。

「怖がつても仕方ないんじゃないのか？」

「そうかな」

だが地震を怖がる彼はそうは思つてはいないようであつた。

「とにかく怖いものは怖いんだ」

「ふうん」

熊は鉄火巻を食べながらその話を聞いている。海苔の硬い食感と山葵醬油を効かせた鮪の濃厚な味が口の中を支配する。そこに酢と白米の味も加わり絶妙な味となっている。

「地震が起こるって聞いただけでな」

「けれどな」

熊はそんな彼に忠告めいたことを述べてきた。

「地震が起こつたら逃げるんだよな」

「ああ」

彼は頷いてそれを認めた。

「それは止めた方がいいぜ」

「そうなのか？」

「そうさ。それよりはどっか狭い建物の中に隠れたり机の下にでも隠れろ」

「それがいいのか」

「道に出るよりはずっと安心だぜ。それに落ち着いてな」

「狭い建物か」

彼はそれを聞いて考える顔になった。それからまた述べた。

### 第三章

「じゃあ雪隠とかか」

「そこはいいな」

熊もそれに頷いてきた。

「すっかりしてるしな」

「そのまま慌てて下に落ちるんじゃないぞ」

「それで糞まみれになつてな」

「ああ、それだけはな」

地震を怖れる彼もそれは笑って返していた。

「そうしたら今度は糞が怖くなつちまうよ」

「ははは、臭くなつちまうしな」

「そうだよな」

「だから雪隠だけは勘弁だぜ」

その男は苦笑いを浮かべながら言った。また花札をはじめている。

「他の場所にしとくさ」

「そうか」

「まあ地震がなければそれに越したことはないけれどな」

「そうだな。けれどそうは上手くはいかないのが」

「世の中つてやつか」

「残念だけれどな」

そう言いながら花札をする。今度もまた熊の勝ちであつた。

それで金が彼のところに集まる。小銭を集めながら別の男に尋ねてきた。

「で、御前の怖いものは何だ？」

「俺は雷だ」

彼はぶるってそう述べた。

「あれだけはいけねえ。音を聴くだけで身体がすくんじまう」  
「そんなにか」

「ああ。雷獣っているだろ」

空想上の動物である。雷と共に落ちてくると言われている。

「あれを絵とかで見ただけで思い出しちまうんだ」

「そりやまた徹底してるな」

熊は小銭を財布の中に入れながら応えた。

「そんなに嫌いか」

「嫌いつていうよりは怖いんだよ」

本当に少し身体を震わせて答える。

「今だつて話をするだけで駄目なんだ」

「ほお。じゃあ今鳴ったらどうだい？」

「夢に見ちまうな」

そう答えた。

「だからな。雷だけは駄目なんだ」

「わかったよ。じゃあこの話は止めだ」

「済まないな」

「それでだ」

最後の一人がここで口を開いた。

「俺は親父が怖かったな」

「そうかい。おっと」

それが出たところで熊も周りの者もあることに気付いた。

「さつき火事の話が出たしよ」

「これで地震、雷、火事、親父が揃ったな」

「そうだな。縁起が悪いぜ」

流石にこれで縁起がいいと言えるものではなかった。皆笑いながら述べる。

「まあこれで縁起をつけるとするか」

「全くだぜ」

そう言いながら酒を楽しむ。ここでふと中の一人が熊に尋ねた。

「それでな熊さん」

「何だ？」

「熊さんの怖いものは何だい？」

さっきの話をそのまま熊に振ってきたのだ。

「俺のか？」

「ああ。何かあるか？」

「俺達は言っただ。熊さんだつてよ」

「俺に怖いものか」

だが熊は杯を手に不敵に笑っただけであつた。右の膝を立てて飲むその姿勢が実に粹だ。

「あると思うか？」

「さてな」

「けれど熊さんも人間だ。何か一つあるんじゃないか？」

「そうだよ。あるんなら教えてくれよ。酒に免じてさ」

「まあ酒がなくても別にいいんだ」

熊はまずはそう述べた。

「俺は隠し事はしない。いいな」

「ああ」

一同その言葉にはまずは頷いた。

「それでだ」

そう前置きしたうえで語りはじめた。

「そんなものはねえな」

「おっ!？」

「大きく出たねえ、また」

仲間達はそれを聞いて面白そうに述べた。

「だって本当だからな。さっき出て来たものはどれも怖くとも何ともねえんだ」

自信たっぷりといった様子でそう述べる。

「喧嘩も負けたことがねえ。強いて言うならこの酒と鉄火巻きが怖いな」

「だから飲んで食って始末しちまうってわけだな」

「ははは、そういうことだ」

と落語から話を取って言う。

「それだけだな、怖いのは」

「凄いなえ、その肝っ玉」

「こりゃ熊さんに適う奴はいないってわけだな」

「おう、そういうことさ。それでだ」

熊はいささか調子に乗ってそのまま話をしてきた。ところが。

## 第四章

「ん!？」

「どうしたい？」

「いやな」

天井に何かを見た気がしたのだ。境内の天井なのでかなり高いがそこに何かがいたような気がしたのである。熊はそれを察して違和感を感じたのだ。

「何だ、一体」

そして天井を見上げるとそこにいたのだ。

黒く長い髪は乱れまるで嵐の中の蛇の群れのようであった。服の裾は乱れて地獄から出て来たようでその真つ青の顔は怒りで牙まで生えているような感じであった。唇は血の様に赤く目もまた赤く爛々と輝いていた。とんでもない格好の女がそこにいた。

その顔を見ると。熊がよく知っている顔であった。

「な、何で御前がそこに」

熊はその女を見て急に震えだした。顔が見る見るうちに真つ青になっっていく。

「どうやってそこに来たんだ?おい」

声も震えている。まるで見てはいけないものを見てしまったかのようになだ。

「!?!どうしたい熊さん」

「急に青くなりだしてよ。酔ったかい？」

「おいおい、まだ酔うには早いぜ」

仲間の一人がそれを聞いて笑って言う。

「ささ、一杯。まだまだこれからだぜ」

「お、おお」

熊は震える声のままそれに応えた。

「そうだな。じゃあもううか」

「一体どうしたんだよ、本当に」

「上に何かいるのか？」

「見えないのか？御前等」

そんな彼等の様子を見て逆に問う。

「あれが」

「あれもこれも」

「上にあるのは天井だけじゃないか」

彼等はそれぞれ上を見上げて言う。どうやらその女が見えているのは熊だけであるらしい。

「どうしたんだよ、本当に」

「飲み過ぎなのかい？本当に」

「いやな」

熊はそれを受けて遂に今見えているものと言った。

「上にな」

「ああ」

「俺の女房がいるんだ」

「何だって!？」

皆それを聞いて驚きの声をあげた。それを聞いて酒を楽しんでいたヤクザ者達も顔を向けてきた。

「それは本当かい」

「ああ、何か俺にだけ見えるらしいな」

熊は青い顔でそう述べる。

「女房がよ」

「そうなのかよ」

「おい熊さん」

仲間のうち一人が彼に声をかけてきた。

「すぐに家に戻りな」

そしてこう言ってきた。

「家にか」

「そうだよ。こりゃ奥さん相当怒ってるぜ」

「そ、そうかもな」

それを聞くと余計に顔が青くなっていく。どうやら女房が心の奥底から怖いらしい。

「ほら、早くよ」

「あ、ああ」

青い顔のままそれに頷く。酔いも急に醒めていつていた。

「じゃあな」

「ああ、またな」

「すぐに家に帰るんだぜ」

「わかった、じゃあな」

「ああ」

すぐに立ち上がって賭場を後にする。そしてそのまま家に帰るのであった。まるで風のように。後には何も残しはしないといった感じであった。

長屋に入る。するとそこには鬼がいた。

「あんた」

家の中に賭場で見たままの格好の女房がいた。本当にそのままの姿であった。

「よ、よお」

熊は真っ青な顔のままそれに応えた。

「今帰ったぜ」

引き攣った笑いと共に。だがその笑いも今や空しいだけであった。  
「今何時かわかってるんだらうね」

「ま、まあな」

その真っ青な顔で答える。

「いないと思ったらふらりと帰って来て。またあそこにいたんだね」  
「わ、わかるのか」

「わかるんだよ。いつものことだから」

「そうか」

「そうだよ。それでね」

目がさらに剣呑なものになっていく。その目で言う。

「覚悟はできてるんだろうね。ここはチビ達もいるから」

そう言って立ち上がってきた。それからまた言ってきた。

「表で出ようね。いいね」

「ああ……」

後はもう言うまでもなかった。熊はその夜女房に散々な目に遭った。それは何よりも怖ろしいものであったのは言うまでもない。

## 第五章

次の日。仕事場に傷だらけの熊がやってきた。昨日花札をやっていた男達がそんな彼を見て言葉をかけてきた。

「よお」

「ああ」

まずは挨拶からだ。それから話に入る。朝日が眩しいがそれ以上にそれが傷に滲みる。

「どうやらあれから散々だったらしいな」

「まあな」

熊は苦笑いをしてそれに応えた。見れば顔にも身体にも傷がある。

「どうやらあれはな」

「かみさんだったか」

「そうさ。それでだよ」

彼は言う。

「昨日本当にえらいことになった。ほれ、見てくれよ」

その顔の引つ掻き傷を指差して見せてきた。

「こんな有り様だよ」

「おいおい、猫のみたいだな」

「そつだろ。他にもあるぜ」

「ああ、確かに」

「ここにもあるな」

左手には噛んだ跡がある。痣になっていてそれが実に生々しい。

「他にもな。あるんだよ」

「見せられない場所にもか」

「ああ、髭だつてボロボロになったしな」

彼は言う。目の周りにも丸い痣があり唇も腫れてる。本当に酷い有様の顔であった。

「朝髭だけはなおしてきたがな」

「そりやまた」

「えらい災難だったな」

「まあな。いや、酷かったぜ」

熊は半ば呆然とした声でそう述べた。

「昨日は特にな」

「特にかよ」

「ああ」

熊は答える。

「結構いつもやられてんだな、奥さんに」

「そうさ」

仲間にそう返す。

「俺も女房にだけはな」

「勝てないか」

「勝てるとかそういうもんじゃねえ」

そこまで言う。

「ありや鬼だ。冗談抜きで本当の鬼だ」

「そうか。鬼か」

「そうだ。だから昨日の夜あんなのが出たんだろうな」

それは生霊であつたのだ。霊になるのは何も死んだ人間だけではない。生きている人間も怨み募りが深まれば怨霊となったりするのだ。それが生霊である。

「いや、冗談抜きでな。流石の俺も」

そしてここで言った。

「怖かったぜ」

「おっ」

「熊さん、言つたな」

彼等は熊の今の言葉を聞いてニヤリと笑った。

「ん！？何がだ？」

だが熊は彼らの顔を見てもキョトンとするだけである。自分が今何を言つたのか今一つわかつてはいないようである。

「だからさ、怖いって」

「今言ったじゃないか」

「あっ」

それを言われて自分でもやっと気付く。

「そうだな、そういえば」

「そうさ」

「そうか、熊さんでも怖いものがあつたんだな」

仲間達はそれを確かめることができて嬉しそうであつた。怖いものなしの熊でも怖いものがある、しかもそれが極めて身近な存在だとわかつて何かほつとした嬉しさを感じたのである。

「そうだな」

熊も自分でそれを認めた。

「俺でも怖いものがあるんだな」

「そうだよ」

「まあ本当に怖いみたいだな」

「ああ、怖い」

それをまた認める。

「女房だけはな」

「そうだよな」

「俺もおつかあは怖いな」

見れば皆そうであつた。女房が怖いという人間は昔も今も極めて多いのである。あの漢の高祖劉邦もまた恐妻家であつた。もつとも彼の場合はかなりの酒好きの女好きという人物であるからそれだけ妻に後ろめたいところがあつたのだが。ここに恐妻家の秘密がある。自分が好き勝手にしているから女房に頭が上らないのである。

「誰だつてそうだよ」

仲間のうちの一人が言つた。

「あれ以上怖いものはねえ」

「そうか」

「そうさ。なあ熊さん」

「何だ？」

何か面白そうに笑う仲間の一人に顔を向けた。そして声に応えた。

「どうだい、怖いものがあつたじゃねえか」

「おっ」

それを言われてやっと気付いた。

「ああ、そうか」

「そうだよ。怖いものがあつたな」

「ああ、そうだな」

「何だ、熊さんにも怖いものがあるじゃねえか」

他の仲間達もそれを言われてやっと気付いた。

「そうだよ、かみさんが怖いものだったんだ」

「成程、そういうことか」

「本当だな」

熊は自分でもそれを認めた。そして納得したように頷いた。

「俺にも怖いことがあつた」

「全くだ」

「じゃあさ。結局」

「ああ」

熊は仲間達に応えて言う。

「怖いものがない奴なんていないな」

「そういうことだな」

あれだけやられた次の日だというのに気分がやけに清々しかった。そんな不思議な朝のことであつた。熊はあちこち傷がある顔で大きな口を開けて笑っていた。まるで憑き物が落ちたかのように朗らかに。

怖いもの 完

2  
0  
0  
6  
.  
1  
2  
.  
1

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7629b/>

---

怖いもの

2010年10月8日14時36分発行